



磐梯山の緑をつくった人たち（緑ふたたび）

ひばら
桧原湖岸から見事な稜線を描く磐梯山を望むと、峨々として切り断つ爆裂火口壁の真下から、広大な面積に見事に成長したアカマツの群生がみられる。噴火から十数年経って、政府や県では荒廃したこの地を開拓するにあたり、民間の力と資金を導入しようと計画した。

おしざわ
現喜多方市塩川町の白井徳次は、明治三十五年雄子沢の佐藤栄次郎と共同で、噴火口下の植林計画・方法調書などを県に提出、許可後植林作業を進め、明治四十四年に亡くなったが、その遺志は子から子へと引き継がれている。また、喜多方市の酒造業矢部長吉も、明治三十六年から作業員を雇い、五色沼一帯に、赤松の苗木を植えたが、全財産を使い果たして志半ばで破産した。やむなく、会津若松市の醤油醸造業・遠藤現夢（本名・十次郎）や呉服店主・宮森太左衛門ら五人に権利を譲渡した。現夢は明治四十三年ごろから植林をはじめ、柳沼近くに事務所を兼ねた別荘を建て、旧高遠藩士の林学博士・中村弥六の技術指導を受けた。当初はアカマツ・スギ・ウルシ・カエデやサクラを植えて、事業は十年を費やして大正八年に完了した。

「なぜ木を植えるのか？」と尋ねられた現夢は「俺やお前の時代には役に立たないが、子孫や国家のために役に立つときが来る」と答えたという。また、「弥六沼」の名は、植林の指導を受けた中村弥六博士に感謝し、現夢が名付けたという。

五色沼自然探勝路を歩いていると、この自然を破壊することなく、次代に育て引継ぐことが、我々の使命であることを強く感じないではられない。



▲五色沼自然探勝路にそびえるアカマツ



ようこそビジターセンターへ

パークボランティアコーナーのご紹介

磐梯朝日国立公園 裏磐梯地区では、現在約30名のパークボランティアの方々が活動されています。「パークボランティア」とは、国立公園において探勝路の巡視活動や外来生物の防除活動などをおこなっている方々のことです。

裏磐梯を愛するパークボランティアの方々に、裏磐梯の自然の魅力や活動の様子などを自由に発信していただく場として、パークボランティアコーナーを開設しました。今現在は、裏磐梯の自然の一コマを収めたとおきの写真やイラストなどの作品が展示してあります。ぜひご覧ください。



▲パークボランティアコーナー